

「主体的，対話的で深い学び」に向けた教材としての「カーリング」への期待

～市内教員向け「カーリング授業事前研修」の試み～

侘美 俊輔

●要約

我が国では，新学習指導要領において「主体的，対話的で深い学び」の重要性が謳われている。このような状況を鑑み，筆者は 2021 年に「教材としての『カーリング』」の可能性について「教員免許更新講習」の授業プログラムをもとに検討し，上梓した。拙稿で残された課題として，カーリング指導経験の少ない教員が「学校現場でどのように授業を組み立て，単元として実施するのか」，「カーリング協会などが行えるサポートは何か」という新たな問いが導きだされた。

そこで本稿は，学校現場の教員がカーリング授業を実施するための工夫や，注意点などを理解しやすくするために実施された「カーリング授業事前研修会」の取り組みと，学校側の論理を読み解くために実施した元校長へのインタビュー調査を事例に，「カーリングの教材化」に向けた今後の可能性を検討することを目的とした。

●キーワード

カーリング

主体的，対話的で深い学び

コミュニケーション

作戦，戦略

教材

はじめに

我が国では、2017年3月に改訂された「新学習指導要領」において「これからの社会が、どんなに変化して予測困難な時代になっても、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、それぞれに思い描く幸せを実現してほしい」とされ、「主体的、対話的で深い学び」が重視された。また、2016年12月の「中央教育審議会答申」による「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」においては、「子供たちが主体的に学習に取り組む場面を設定していく必要があり、『アクティブ・ラーニング』の視点からの学習・指導方法の改善が欠かせない。また、学校全体で評価の改善に組織的に取り組む体制づくりも必要」とされる。そのため今日の学校現場においては、「アクティブ・ラーニング」の要素を取り入れた「主体的、対話的で深い学び」に資する授業づくりが求められている。

このような現状を鑑み、筆者は拙稿(侘美, 2021)において体育・スポーツ領域から「主体的、対話的で深い学び」に資する授業づくりの1つとして「カーリング⁽¹⁾」に注目し、2020年8月4日に開催された教員免許更新講習において「北海道だからこそできる『カーリング』を活用した授業展開～教材としての『カーリング』の未知なる可能性～」を担当した。拙稿においてカーリングへ注目した理由は、下記の2つである。

第1に、カーリングという「種目」への注目である。カーリングは、4人によるチームプレーを基本とし、作戦を議論しながら試行錯誤することから、新学習指導要領における「主体的、対話的で深い学び」との親和性が高いものと推察される。カーリングは、単に<ストーン>を1人の選手が投げただけではなく、<スweep>動作の重要性がカーリング界で認識されている。そのため、スweep・フォーム、ストーンに対する(スweepの)角度、2人いるスweepの各役割などが日進月歩で変化している。その結果、投げ手、<スキップ>、<スweep>の連携による「チームスポーツ」としての側面が強くなってきており、「主体的、対話的で深い学び」との親和性は、より強固になりつつあると考えられる。

第2に、2020年5月、稚内市に「紆余曲折」を経ながら「通年利用可能」なカーリング場が開業した点である。稚内市においては、2016年から2017年にかけて市議会で「カーリング場建設の是非」が議論されていた。当時の新聞報道や市民の声として、「新カーリング場建設」への反対意見も少なくなかった。地域住民を巻き込んだ「新カーリング場建設」の是非は、稚内市を含む宗谷地方の教育関係者にとっても大きな関心事項の1つであった。このような「紆余曲折」があったため、カーリングは宗谷地域においてポジティブとも、ネガティブとも受け取られる諸刃の剣であった。

しかしながら、2023年1月現在、稚内市の「新カーリング場」では、日本カーリング選手権大会、全日本大学対抗カーリング選手権大会など日本カーリング協会(JCA)主催の全国大会も多数開催された。その影響として、カーリングや、新カーリング場への市民意識は変容しつつある。昨今のカーリング人気の高まりを受け、稚内カーリング協会には学校現場から体験学習や、授業依頼などが多数押し寄せている。ところが、稚内市では昼間に児童・生徒を指導できるマンパワーが不足している。そのため稚内カーリング協会では、「学校現場の先生方が自身で授業を担当できないか」と模索していた。

そこで筆者は、稚内カーリング協会からの依頼により、2022年6月24日に開催予定の「カーリン

「主体的、対話的で深い学び」に向けた教材としての「カーリング」への期待
～市内教員向け「カーリング授業事前研修」の試み～

「授業事前研修会（以下、「研修会」とする）」を実施する協会員・カーリング場施設職員向けの「事前講習（2022年5月、6月に各1回ずつ）」と、本番当日の「研修会」の監修を担当した。筆者は「研修会」を監修する立場となったため、学校現場の教員の前で直接講義を実施したのは、カーリング場施設職員の2名である。「研修会」当日のスライド資料や、教え方などは、筆者の「事前講習」の内容を反映した構成となっていた（写真1）。



写真1 「研修会」当日の様子 赤い防寒着を着ている2名が講師（カーリング場施設職員）

当初、筆者は稚内カーリング協会から「研修会」の講師を依頼されたが、固辞し、前述の内容となった。筆者が協会からの依頼を固辞した理由は、実際の学校現場の授業中に筆者が立ち会えない、常にカーリング場にいるわけではないためである。その点、カーリング場施設職員の2名であれば、学校授業時に対応することが可能である。さらに彼らは、カーリング協会の公認コーチ資格である「日本スポーツ協会公認カーリングコーチ1」を保持している。さらに年齢的にも20代と若く、彼らに指導経験を積ませること、市内の学校と施設の「橋渡し役」となることなどを期待し、筆者は依頼を固辞し、彼らが指導するよう逆提案を行った。

ところで、筆者は前掲の拙稿において「カーリングの指導方法の探求」の必要性について言及した。特に「教師、部活顧問向けの『指導書』も充実しているとは言えないため、今後の研究の蓄積が望まれる。さらに幼児、低学年の児童などルール、競技を重視するよりも、『遊びながらカーリングを行う』ことなど取り入れた授業方法についても検討が必要」と指摘した。本稿は、拙稿における筆者の問題意識の延長線上に位置するものである。

そこで本稿は、学校現場の教員がカーリング授業を実施するための工夫や、注意点などを理解しやすくするために実施された「カーリング授業事前研修会」の取り組みと、学校側の論理を読み解くために実施した元校長へのインタビュー調査を事例に、「カーリングの教材化」に向けた今後の可能性を検討することを目的としている。

繰り返しとなるが、国内では、現場の学校教員が利用できるカーリングの「指導書」、

ル」は、ほとんど刊行されていない。そのため、学校現場の教員は、どのように授業展開をすればよいのかという大きな不安を抱えている。一方で、稚内市のような地方都市では、カーリング競技者の多くが昼間の業務（本業）に従事しており、学校現場の指導へ足を運ぶことが容易ではない。そのため、現在の稚内市では、カーリング指導場面において教員の「自立」を促すようなマニュアル、指導方法の確立が急務と考えられる。本稿はこのような実践現場から惹起した「問い」をもとに構成される。

なお、本書はカーリング関係者、カーリング指導を始めようとしている現場の教師によって読まれることを強く期待している、そのため「カーリング用語」について、初歩的な解説はほとんど行わない。読者各自で文脈を埋めていただきたい。カーリングの専門用語と思われるものについては、初出の際に〈 〉をつけてある。

1. 元退職校長へのインタビュー調査

2022年3月25日、筆者、稚内市教育委員会職員、稚内市みどりスポーツパーク職員の3名で、元退職校長Aさんへのインタビュー調査を実施した。Aさんへのインタビュー調査は、2022年3月25日の13時～15時に旧稚内北星学園大学（現：育英館大学）の教室内で行われた。Aさんへのインタビュー調査の主な内容は「部活動の地域移行」についてであったが、後半に「学校とカーリング」について尋ねた。

Aさんは宗谷管内での教員、管理職、さらには大学での指導経験を有する人物である。Aさんへのインタビュー調査を行った一番の理由は、管理職として「校長や各学校の裁量権」、「学校における予算付け」、「市教育委員会、北海道教育委員会との折衝」、教諭（=いわゆる平教員）として「教科担当者の裁量権」、「学校教員の多忙さ」など双方の経験を有するためである。さらに宗谷地域での教育歴が長いこと、地域の実情に詳しいこともインタビューを実施した理由の1つである。

Aさんへの質問は、「①新カーリング場建設後の『カーリング』へのイメージの変化」、「②カーリングを学校側で取り入れ方」、「③カーリング学校の『授業』で取り入れるにあたっての課題」、「④『カーリング部創設』の学校側からみた課題」などの4点を中心に半構造化インタビューを行った。

なお、Aさんの方言、語り口調は、インタビュー当初の雰囲気を残すためそのまま掲載しているが、必要に応じて筆者が（ ）にて注釈を加えている。また筆者による質問は、〈 〉によって表記している。

1-1. Aさんへのインタビュー調査結果

①新カーリング場建設前の『カーリング』へのイメージ

（2020年に）カーリング場（稚内市みどりスポーツパーク）ができるとき、正直に「もっと違うところにお金使えばよいのに」とかさ、どっかあってさ。ところが、全日本（=日本カーリング選手権）を（稚内市で）やってさ、そしてオリンピックもあってさ、そういうのがあったときに、なぜかさ冬季オリンピックはすべて見たんだよね。最初から最後まで。ずーっと見て、夜中でも。眠たくなったら録画して。それは何でかっていったら、やっぱり面白いん

だよな。

②新カーリング場建設後の「カーリング」へのイメージ（教育者としての視点から）

（カーリングへのイメージは）すごい変わったと思うよ。多分学校はカーリング授業に入りたいと思っているんだろうと思うんだよな。人気も出てるし、上手な高校生が出てるよね。常呂ジュニアみたいにさ。常呂ジュニアと体張れるようになったら、嬉しくなるね。そのためには少年団なんだろうけど、裾野も含めて広くなる話もあるし、今大阪から孫来てんだけど、1回ストーン投げさせてから帰らせようかなっていうぐらい、1年生なんだけどね。そのぐらい注目っていうか、興味が湧いてきて、皆が意欲的になってるなどいうふうに思ってますね。これを、授業の中に取り入れるとしたときに問題があるのは、教育課程上の、簡単にいえば学習指導要領にこの種目がのるか否かのらないか。

③カーリング学校の『授業』で取り入れるにあたっての課題

《先生方がカーリング協会に「丸投げ」ではなく、事前にもう少しカーリングの勉強をしてカーリング授業に臨めないものか？》

そうやって言ったらたぶん来ない。「研修でどうですか」、その積み重ねを、1回だけじゃなく、何年も、何年も、何回もこう積み上げていくと、学校に根付くと。それはその全ての学年、学年じゃなくても、体育の授業にカーリングをやります。そのときに、時間を調整するならば、先生方が（時数を）多くしたら大変だから、2年生全員で行くって言ったら先生方が6人連れて行きましようとかって言えば、学年としてこの取り組み。1年生は2年生になったら、カーリングできるぞっていう、3年生はね、受験もあるから、どこでカーリングやるっていうのは時期（設定）が難しく、夏は中体連。秋は修学旅行。冬は受験だから、難しくなる。2年生ぐらいで全員やる、そんなふうな組み方ができるような意識、イメージで、カリキュラムに入れられる。

《どうやったら、稚内や、学校にカーリングを定着させられるか？》

カーリング場は、「夏」もできるんだよな。そうするとカーリングという競技は、夏の競技の中に取り込むことができるし。冬に関係ない。マイナス面でいうと、（北海道の冬の体育授業で当たり前の）スキーが（若者たちに人気のある）スノーボードにはなっていないんです。理由は金かかるから。どうしてかという（道具を）持ってるのもいるけども、持っていない子は、スノーボード用意しなければならない。今の時代だからスキーウェアで、スノーボードはいかないでしょ。ところがカーリング、金かかんないよね。今言ったように夏冬、季節に関係なく稚内で。体力作りのためにできるっていうふうになると、これは（学校現場の受け取り方も）違う。

《単元としての組むのは難しいか？》

体育の中で組むとしたら、せいぜい8時間ぐらい。移動も入っちゃうから、実質、ちゃんとカーリング場っていうか、真ん中で少し時間とったら、せいぜい3、4時間ぐらいに。それでも「1単元」としてカーリングっていうふうに。大事なのはさ、全ての子供が経験

できるっていうのは、大事なところ。

《カーリング場への移動時間、距離的に遠い学校はどうすればいいのか》

そういうふうになった (=かつてのプール授業にバスでいった) のと同じように、バスでカーリング場に来て、水泳の代わりに夏、カーリングをやります。そしたら学校が面倒見きれなかったら、夏やるどころと、秋やるどころ、冬やるどころっていうふうになれば、今の学校数ならなんとかなるんじゃない。カリキュラム上は、すべての学年じゃなくてもいいしよ。(中学校) 2年生になったらやります中学校。それから小学校は高学年でもいいから、5年生、6年生でありますっていうふうに位置づけたら、裾野が広がるかなあ。

④ 稚内市内の中学校、高校における「カーリング部」の見込みについて

それは(カーリング関係者には)申し訳ないけど、残念だけど(部活は)できないと思う。理由は「少子化」。だって今、部活が成立しないでしょ。部活すら。だから、野球、バスケ、サッカー、バドミントン、バレーとかだいたいどこでもある。これが人数が足りなくて成立しない。全員加入にしなければ、もっと成立しない。だって今、一つの学校で平均200人いないんだよ。中学校で。全校生徒。小さいとこで、稚内中なんてすごい小っちゃくなりましたよね。(稚内市立稚内) 港小学校、複式だからね。市内の小学校なのに。そうやって考えた時に、少子化だから、部活が難しい。ただ、その地域というか、逆にいえば、クラブにしたら地域のカーリングクラブみたい、少年団的な。そのかわり年齢構成が、小中高ってクラス分けをするようなところ。一応4人いれば成立する事を考えれば、小学校クラス、中学校クラスとか。(カーリング男子の) 常呂ジュニアじゃないけど、稚内ジュニアみたいに。

1-2. Aさんの回答から考えられること(考察)

本節では、Aさんの回答を4つの観点から分析し、考察を加える。第1に、Aさん自身のカーリングに対する「イメージの変化」である。「正直に『もっと違うところにお金使えばよいのに』」と述べていたAさんであるが、その後の日本カーリング選手権などではTVに釘付けとなったという。前述したように稚内市では、「新カーリング場の建設問題」があり、建設コスト、経費のみに市民の関心が向きがちであった。そのため「カーリング」は、スポーツ種目としてではなく、象徴闘争に巻き込まれ、ネガティブに捉えられることが多かった。これは行政の丁寧な説明、ビジョンの見せ方など推進側も大いに反省すべき点はあったように推察される。しかしながら、TV中継などで稚内が露出され、トップ選手が数多く訪問するようになったことで、市民のカーリングへの意識は変化しつつある。Aさんもその1人であると推察される。

第2に、「夏でもできる」という点である。北海道の学校では、冬季間にスキー、スケートなどのウィンタースポーツを実施するのが一般的である。稚内市でもかつてはスキーを実施する学校が多くみられた。しかしながら、道内ではスキー用具の経済的負担(年間10万円程度)の問題などから、スキー授業を取りやめる学校も少なくない。スケートについても、かつては学校のグラウンドにスケートリンクを整備することも見られた。しかしながら、リンク整備のコスト、マンパワーの不足などから

「主体的、対話的で深い学び」に向けた教材としての「カーリング」への期待 ～市内教員向け「カーリング授業事前研修」の試み～

こうした取り組みは大幅に減少している。ゆえに、道内ではスキー、スケートとともに取り組みにくい土壌が形成されつつあり、稚内市においても不可避ではない。ところが、カーリングは手袋、帽子などの簡単な防寒対策をすれば授業が可能である。カーリング用具はカーリング場で無償レンタルすることができ、家計にも優しいウィンタースポーツである。

第3に、「単元としての可能性」についてである。この点については、Aさんのいう「かつて稚内市で実施されていた水泳授業の送迎」のような体制を構築できれば、市内小中学校によるカーリング授業の可能性は大いにあるだろう。そのための行政による環境整備が不可欠である。しかしながら、現場の教員には、カーリング授業を指導するノウハウ、方法論的な蓄積や、カーリング種目の運動経験が十分とは言い難い。周知のとおり学校現場の教員は多忙であり、インタビュー調査で「事前にもう少しカーリングの勉強をしてカーリング授業に臨めないものか」と尋ねたところ、「(そのようにしたら) たぶん来ない」との回答を得た。そのため、協会や外部の側から学校教員に教育プログラムを提供し、先生方の負担軽減を図る必要があるものと推察される。

また、学校側にとっては、カーリング授業に「どの程度時間数を配当できるのか」など未知数の部分も多い。現状1, 2回程程度のイベント的なカーリング体験に終始し、系統的な学習が不十分なように散見される。そのため、稚内市の教育委員会には、送迎バスの準備、教員のスキルアップや、カーリング専任指導者の確保などが求められる。

第4に、「カーリング部の創設」についてである。この点について、カーリングは、他地区においても、従来から学校単位ではなく、地域単位でのチーム構成が多くみられる。そのため「学校」という単位にこだわらず、少年団、ジュニアクラブなどの単位で「みなし部活」、「クラブ活動」として活動するのが現実なように推察される。一例として、従来からサッカーでは、学校部活動に所属せず、Jリーグなどのクラブチーム(下部組織)での活動を経て、プロ選手となったものが多数いる。そのため、「部活」のみが競技スポーツを続ける唯一無二の道ではない。よって、「学校」という単位に縛られない柔軟な地域の発想が求められる。

また、稚内市に「通年型のカーリング場」があるという他地域との差別化をするのであれば、「みなし部活」に終始するのは、地域資源の有効活用という点で疑問符が残る。稚内市の教育委員会、現場の教員もこれまでの競技スポーツ偏重とならず、カーリング、eスポーツ、アーバンスポーツなど「多様化するスポーツ」への対応が必要なのではないだろうか。2023年度からは「部活動の地域移行」の実践が本格化することも予想され、教員が対応しにくい分野においても、地域資源の有効活用によって児童・生徒の希望が叶えられるのではないだろうか。稚内市では、2022年10月に総合型地域スポーツクラブの「みどりスポーツクラブわっかない^②」が誕生し、カーリング、ダンス、スノーボードなど、従来の学校部活動には見られなかったコンテンツを強みとする。今後、学校側と総合型地域スポーツクラブがどのように連携していけるのか、今後の動きにも注目すべきであろう。

2. 「研修会」に向けて

筆者が担当する「事前講習」、2022年6月の「研修会」に向け、稚内市みどりスポーツパークにおいて、コーチ資格を保有する(=当日「研修会」を担当する)カーリング場施設職員2名と意見交換を実施した。以下に提示したものは、筆者との打ち合わせの際に共有された問題意識である。

【カーリング指導における問題意識】

- ・ <デリバリー>を素人教員が教えるのは難しくないか？
- ・ <ハック>を使ったデリバリーの指導が多くなると、授業全体の活動量が低下する？
- ・ 90分（45分×2時間分）×2回程度の学校授業の中で、通常の試合を目指すのは難しい
⇒指導内容の大幅な取捨選択が必要なのではないか？

このような問題意識を鑑み、「研修会」における目標を以下の2つに定めた。①カーリングを専門としていない教師目線から「カーリング」を指導できるようにする、②「主体的・対話的で深い学び」に寄与する「カーリング」の可能性を理解する。上記の目標を設定後、職員とさらなる意見交換を行い、下記のような「研修会」を計画した。

現在、市内の各学校ではカーリング授業が展開され、その依頼が稚内カーリング協会に多数寄せられています。しかしながら、人数・授業回数の増加に伴い、現状のマンパワーでは対応しきれない、ただの体験会に終始してしまうことが多数散見されるようになってきました。

また、日本カーリング協会と学校現場との教育方針、方向性、ニーズの齟齬も見られるようになり、課題がいくつか顕在化してきています。そこで、担当者らはカーリング協会の指導の方向性と、現場の学校教員との意見交換の機会を設け、双方がお互いの考えを共有することが、教材としての「カーリング」に不可欠であると考えます。

3. 筆者による「事前講習」

筆者による2022年5月29日の「事前講習」は、前掲のカーリング場施設職員2名、その他協会員にも参加を呼びかけ、合計7名が参加した。基本的な「事前講習」の流れは、2020年8月4日に「北海道だからこそできる『カーリング』を活用した授業展開～教材としての『カーリング』の未知なる可能性～」の流れを踏襲した。細かな指導内容等は、前掲の拙稿を参照いただきたい。

今回の「事前講習」は、前述の教員免許更新講習「カーリングの可能性」使用したスライドを元に講習が行われた。講習のポイントは、「なぜ『カーリング』が学校教育で必要なのか」についてである。講習は2つの柱をもとに構成された。

第1に、文部科学省による「新学習指導要領」の位置づけについて紹介した。筆者が強調した点は、「主体的、対話的で深い学び」への体育・スポーツ領域からのアプローチとして、「カーリング」に注目した点である。特にカーリングでは、「作戦」をチームで共有すること、「ショットに正解はない」ことなどを確認した。また、講習では「単元」としてカーリングを扱うことを想定し、授業回数、学校種別などの「ねらい」、導入方法も想定した(図1)。

中でも筆者が「新学習指導要領」を念頭に重要視した点は、「作戦ボード」を活用した児童・生徒間で話し合いの時間を設ける点である。特にカーリングでは先攻、後攻それぞれの最終投擲(ラストロ

「主体的、対話的で深い学び」に向けた教材としての「カーリング」への期待
～市内教員向け「カーリング授業事前研修」の試み～

ック) が重要であることから、その前に強制的に 1 分間のタイムアウトを取り、話し合いをするための時間を確保することなどの重要性を説いた (写真2, 3)。

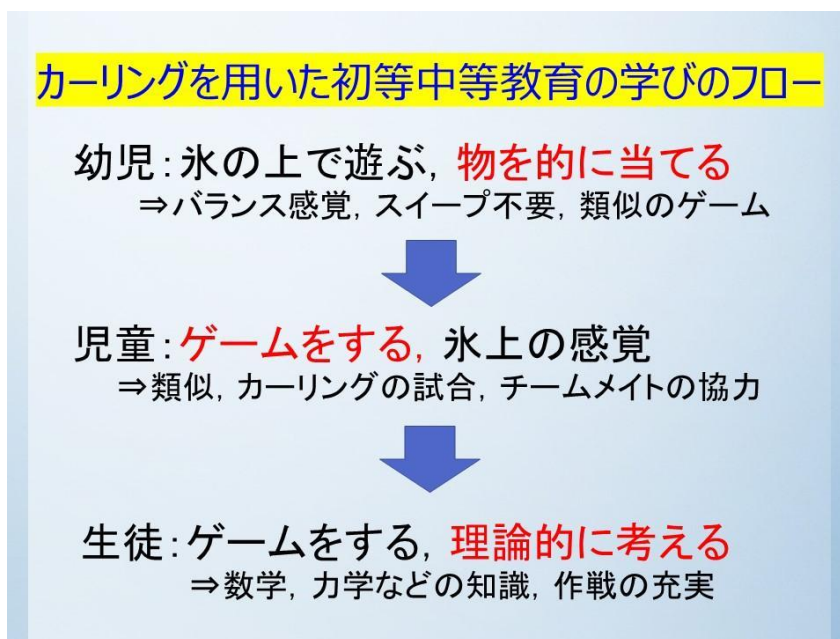


図1 カーリングを用いた学びのフロー

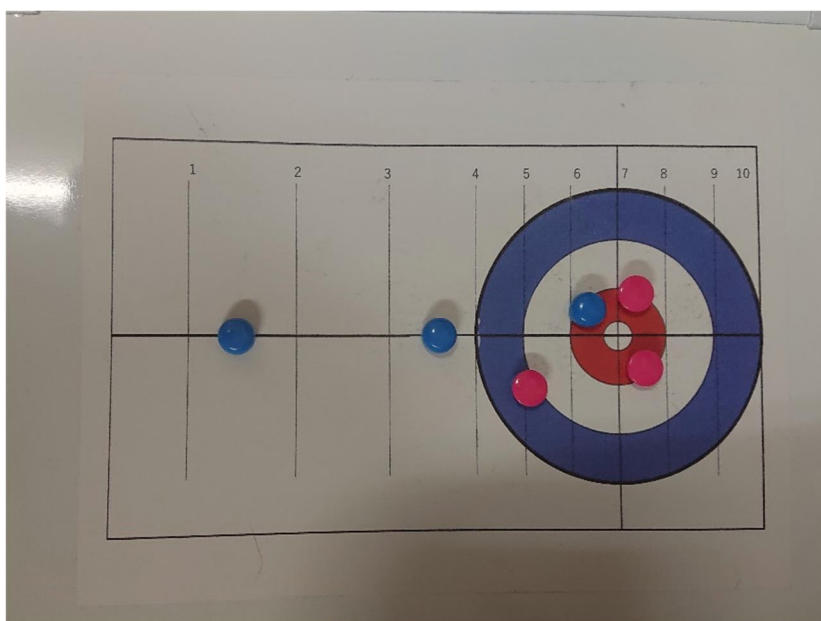


写真2 手製の作戦ボード



写真3 氷上で作戦ボードを使用した作戦会議の様子

第2に、協会の多くが学校現場の仕組み等に精通していないため、新学習指導要領のねらい、体育授業、体育教師の視点なども取り入れながら事前講習を行った。また、体験会などで初心者への指導経験を有する協会が多かったため、講習の最後にはグループワークなども取り入れ、課題、問題意識を共有した(写真4, 5)。



写真4 グループワークの様子

「主体的、対話的で深い学び」に向けた教材としての「カーリング」への期待
～市内教員向け「カーリング授業事前研修」の試み～



写真5 グループワークの結果

4. 施設職員による「研修会」（本番）

「研修会」の受講者は、9名（男性：6名、女性：3名）であった。勤務先は小学校2名、中学校7名であった。なお保健体育免許状の保有者は4名であった。

打ち合わせ資料をもとに、当日の主な流れ、時間配分を下記に提示する。なお、担当者名は個人情報保護の観点から削除している。また、参加者に対し、研究目的での写真、音声の使用について許諾を得ている。

「研修会」が行われた2022年6月は「コロナウィルス（COVID-19）」の感染拡大が比較的落ち着いた時期であった。カーリングの実施に当たっては、稚内市みどりスポーツパーク、ならびに特定非営利活動法人「稚内市カーリング協会」の新型コロナ対策の方針に準拠した。

カーリング授業事前研修会について（打ち合わせ資料より抜粋）

<当日の流れ>

1. 担当者自己紹介…1～2分（写真6）
2. カーリング場前ロビーにて資料を使って講習…20～30分程度（写真7）
3. トイレ休憩，着替え等…5分（切りの良い時間で）
4. 氷上での実技…1時間15分主担当
 - 4.1. デリバリー…15分
 - 4.2. 投球（実際の距離を投球してみて，カーリングの本当の難しさを体感）…10分
 - 4.3. 休憩…5分

4.4. 授業展開の紹介・デリバリーグラグラ (カーペット, 氷上) …5分

- ・ 投げてみる (中心を狙う, ストーンの的当て) 15分
→ 距離やルール変えて行う
- ・ 作戦ボードを使用したミニゲーム・・・25分 (写真8, 9)

5. まとめ…5分

実技・講習を含めてカーリングが「主体的・対話的・深い学び」の実現にまとめる

6. アンケート記入と質疑応答…10分

事後アンケートを記入してもらい, 質疑応答と感想交流



写真6 冒頭のあいさつ (担当者の自己紹介など)

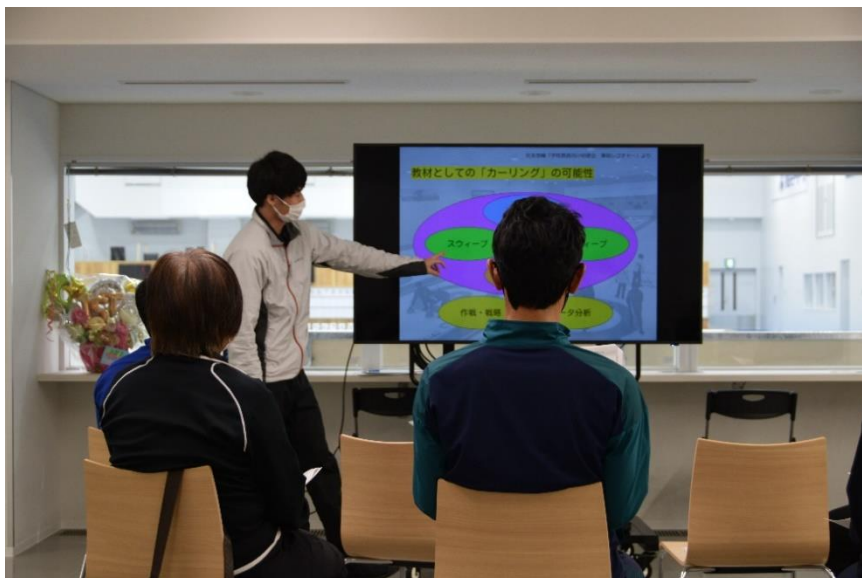


写真7 カーリング場前における講習の様子

「主体的、対話的で深い学び」に向けた教材としての「カーリング」への期待
～市内教員向け「カーリング授業事前研修」の試み～



写真8 ハックを使用しない(=手投げ)によるミニゲーム



写真9 作戦ボードを使用したロールプレイの様子

なお、質疑応答では、実際の学校現場の指導場面において、学級内の人間関係の強さが反映され、「意見を言える子と言えない子」、「押しが強い子と弱い子」がいると考えられるが、どのようにすればよいのかという質問が出た。「研修会」参加者へのアンケート調査については、次章で検討するが、上記の質問内容は、アンケート調査にも類似の記載がなされていたので、そちらで検討を加えたい。

5. 「研修会」参加者への事前、事後アンケートの結果

5-1. 事前アンケート調査の結果

「研修会」参加者に対し、事前アンケートは、施設職員が作成し、申し込み時に学校単位で代表者に記入する形式をとった。質問項目は、「稚内のカーリングのイメージ」、「授業を行うにあたっての不安」、「研修会の期待、質問」の3項目を尋ねた。なお、参加者へは研究目的でのデータの使用について説明し、了承を得ている。回答は、4校中2校から得られた。

①稚内のカーリングのイメージ

- ・充実した設備
- ・最近、中学校の授業に取り入れられるようになったイメージがあります

②授業を行うにあたっての不安

- ・ストーンをスウィーピングしてコントロールすることが、3時間の授業でできるようになるかが心配です。最終的にゲームは成り立つようになるのでしょうか。
- ・指導方法や種類をたくさん知りたいです。

③「研修会」への期待、質問

- ・ゲームを成り立たせるためのコツやポイントをお教えていただきたいです。
- ・たくさんの練習方法が知りたいのでよろしくお願いします。

本事前アンケートは、回収率が50%、学校代表者による回答であり、バイアスの大きなものであったが、授業をどのように成立させるか、練習方法やコツなど、一定程度の指導方法のニーズがあるものと推察される。前述したようにカーリングの指導書はほとんど流通していないことから、カーリング授業者となる現場の教師は、指導のコツなどの「具体的な指導方法」を渴望しているものと推察される。

5-2. 事後アンケート調査の結果

「研修会」参加者に対し、事後アンケートは、カーリング施設職員が作成し、各個人に配布し、終了後に記入してもらった形式をとった。「研修会」中に途中退席した1名がいたため、配布数は8名（回収率100%）であった。質問項目は、「今後の授業展開に役立てそうか」、「主体的、対話的で深い学びの実現にカーリングが有効かどうか」、「授業をするうえで不安な点、疑問点」、「質問と本研修会の感想」の4項目を尋ねた。アンケートの配布数が少ないため、全受講者からのアンケートをそのまま提示し、次項で検討を加える。なお、参加者へは研究目的でのデータの使用について説明し、了承を得ている。

①研修会の内容が今後の授業展開に役立てそうか？

- ・楽しくカーリングを学ぶ方法が体験できました。授業に生かせると思います。
- ・1から教えていただいたので、授業に生かしたいと思います。
- ・後半にやったコーンを置いて～のミニゲームは、すごく生徒達も楽しんでできそうだな

「主体的、対話的で深い学び」に向けた教材としての「カーリング」への期待
～市内教員向け「カーリング授業事前研修」の試み～

と感じました。

- ・はい。実際に体験できたので、イメージがかなり広がりました。
- ・ミニゲームはどのレベル、段階でも楽しめる内容だと思います。
- ・運動に苦手意識のある生徒でも楽しく学ぶことができるので、本研修会をもとに授業を計画していこうと思います。
- ・作戦会議の面で考える、判断、表現の部分に活かしていけそうだなと感じました。

②「主体的、対話的で深い学びの実現にカーリングが有効かどうか」

- ・戦術や戦略、作戦をチームで話し合う授業にできそうなイメージがわかりました。各年ごとにレベルをあげていけば、3年間でそのような授業にできそうです。
- ・最初は、何度もやらないと難しいと感じていましたが、今日やったミニゲームで実践できると思います。
- ・作戦ボードの活用が大切だと思いました。
- ・まずは定石にあたるものを学ぶ必要があると思いました。
- ・カーリングはコミュニケーションのスポーツだと思うので、作戦やアイデアを出しながらやっていくことができるので可能性は大いにあると思います。
- ・ペア・グループでの活動、ゲームのシンキングタイムで対話的に学習ができそうです。楽しさを感じることで主体性の第一歩なので実現できると思います。
- ・粘り強く氷の上で姿勢をキープしたり、仲間と協力するということでカーリングの可能性を感じました。
- ・ゲームが(も)楽しかったです。戦略を考え方針が決まりますが、誰の戦略を取り入れるか中学生ルールが必要かも。時間とも勝負しなければなりません。

③「授業をするうえで不安な点、疑問点」

- ・不安がへりました。
- ・必ず守るべきマナーはありますか。ウォーミングアップをする場所はありますか
- ・3レーンを1人の教師が見れるか、指示が通るかが少し心配です。
- ・けがの危険性、どのようにすれば防げるか。
- ・けがをしないということだけは心がけていきたい。
- ・本校が全校4名の小規模校なので、対話的な授業がどこまでできるか不安です。
- ・カーリングの知識や技能的な部分での指導
- ・メガネが曇るのでその対応(マスクをしていると)

④質問と本研修会の感想

- ・お忙しい中ありがとうございました。もっと多くの指導をする予定の先生方集まるとよいと思いました。こちらからも声かけをしていきたいと思います。
- ・とても学びが多かったです。ありがとうございました。

- ・短時間で”楽しい”と思えるのがすごく魅力的なスポーツだなと思いました。ありがとうございました！
- ・本日の展開のように、滑ることにこだわらず、ゲームにまず親しむことでさらなる向上を目指して滑る練習につながっていくように思いました。（そうしているうちに滑るコツもつかめるような気がしました）本日、人生初めてのカーリングで、見るのとやるのとでは大違いということを実感しました。ありがとうございました。
- ・今日は短い時間でしたが、このような研修を開いていただきありがとうございます。稚内にこのような素晴らしいリンクがあるので、稚内市内の子どもたちが楽しみながらカーリングができるよう、がんばっていければいいと思います。
- ・本日はとても有意義な研修をおこなっていただきありがとうございました。
- ・カーリングの面白さや楽しさを生徒へ伝えていきたいと感じました。
- ・カーリングの楽しさを少し体験できました。ありがとうございました。

5-3. 事後アンケートから見えてくること（考察）

本アンケート結果から見えてきたことは、大きく2つある。第1に現場の教師たちに「具体的な授業のイメージ」を想起させることができた点である。「不安が減りました」、「滑ることにこだわらず、ゲームにまず親しむことでさらなる向上を目指して滑る練習につながっていくように思いました」などの感想は、上記の点を示唆する発言である。事前アンケート、拙稿でも教師たちは未知なるかカーリングというスポーツに「不安」を感じている回答が多くみられた。こうした教師たちに、「研修会」は、カーリングの技量が無くとも授業を組み立てられるプログラムを提供するよう心掛けられていた。その証左として、「楽しい経験」などの感謝を述べた回答が多かった。

また、「ハック」を授業で使用すると、1か所につき1人の児童・生徒しか使えない。残りの児童・生徒が見ている中で1人の子どもが投げるといった状況となり、授業効率、活動量を考えた場合に望ましいとは言えない状況が発生する。また、1シートに16個しかないストーン数を考えてもハックを使用した授業効率が良いとは言い難い。そのため「ハック」を使わず、「遊び」や「作戦」などのカーリング以外の部分に重点を置き、「主体的、対話的で深い学び」という観点からも「作戦ボード」を使用した作戦会議に重点を置くことは理にかなっているものと推察される。しかしながら、「研修会」の質疑応答でも指摘があったように「児童・生徒の力関係」、「スクールカースト」といった子どもたちの序列にも配慮する必要があると考えられる。そのためには、「ルールの工夫」、「作戦会議の決め事」など、教師側に細かな配慮が必要になるものと推察される。

第2に、「怪我の防止とリスクマネジメント」である。この点は「研修会」において、現場の教員にさほど伝えることができなかつた点である。「研修会」では初心者向けの実技、授業プログラム提供することに力点を置いたため、時間の制約上強調することができなかつた点である。

この点について筆者が担当した協会員向けの「事前講習」のグループワーク、これまでの指導経験、実際のカーリング場での怪我の発生状況を勘案して考察を加えたい。カーリングは、大きく分けて「①ストーン」、「②デリバリー」、「③スイープ」の3つのポイントで怪我の発生率が高いと考えられる。筆者の授業者としての経験上、①ストーンは、高速のテイクショットを手や、足で止めよう

「主体的、対話的で深い学び」に向けた教材としての「カーリング」への期待 ～市内教員向け「カーリング授業事前研修」の試み～

とした場合、また石から目を離している児童、生徒がいる場合に発生しやすい。②デリバリーは、片足重心となった際に、軸足が流れ転倒するが多い。③スイープは、掃く動作に一生懸命になりすぎるあまり、バランスを崩し、転倒することが多い。このスイープ時の転倒が一番危険である。稚内のカーリング場では、カーリング体験者が救急車で運ばれることもないわけではない。このようにポイントを絞った「怪我の防止策」についても「研修会」で組み込む必要があった。この点は、今回の反省点である。今後もカーリング場施設職員らによって、現場の教員に向けた継続的な情報提供（特に「怪我の防止等」に関すること）が必要である。

おわりに

本稿は、学校現場の教員がカーリング授業を実施するための工夫や、注意点を理解しやすくするために実施した「研修会」の取り組みと、学校側の論理を読み解くために実施した元校長へのインタビュー調査を事例に、「カーリングの教材化」に向けた今後の課題を検討することを目的としていた。カーリングは他のスポーツと異なり、教師、部活動の顧問向けの「指導書」が充実しているとは言い難い。そのため、今後の研究の蓄積が望まれるスポーツ種目の1つと考えられる。

現状として学校現場の教員は、カーリングでどのような授業展開をするのか大きな不安を抱えている。一方で、稚内市のような地方都市では、カーリング競技者の多くが昼間は本業に従事しており、学校現場の指導に足を運ぶことは容易ではない。その現状を鑑み、学校現場側の視点、論理から最適解を模索するのが本稿の試みであった。

本稿から見えてきたことは、以下の2点である。第1に、教師として、特に保健体育を教えてきたものであっても、未知なるスポーツ、教材を教える際には「不安」がある。この点に立脚し、彼・彼女らの不安を取り除くためにサポート体制の構築が急務である。そのため、今回のような教師向けの「研修会」には一定程度のニーズがあるものと考えられる。しかしながら、参加者数を見ると決して十分な集客ができたとは言えない。

また、カーリング協会側の体制整備も急務である。特に稚内市では、マンパワーの不足から、昼間、学校現場と連携する際に指導を求められた場合、その多くが大学生や、みどりスポーツパークの若手職員である。大学生や若手職員には、保健体育免許、小学校免許保持者が1人もいない。そのため、カーリングを経験的に教えることが出来たとしても、「授業」の一環、「体育学的な意義」を考えながらカーリングを位置付けるための知識が十分であるとは言い難い。このようなカーリング協会側へのスキルアップ、知識の向上も不可欠と考えられる。

第2に、「カーリングの教材として」の可能性である。この点は、現行の学習指導要領とも親和性が高く、今回の「研修会」を通じて多くの教師たちにその可能性が届いたものと推察される。ただし現状の「カーリング」の扱いは、「単元」というより「体験」に終始しているといわざるを得ない。サッカーや、バレーボールなどの他の競技スポーツのように、各競技団体の力を利用することなく、ごく「当たり前」に学校現場で取り入れられるよう、教師、保健体育教師が指導できる方法論の確立が必要である。さらに、「総合的な学習の時間」や、「教科横断的な指導」に向けた教材の研究開発なども必要性となるだろう。

ここで本稿の限界と今後の展望を述べておきたい。本稿は、「研修会」の内容と1人の元校長のイ

インタビュー調査を中心に総括的に検討してきた。それゆえ理論的、質的な分析における方法論的な詰め
の甘さは否めない。さらなる理論的な探求、調査母数の拡大、経年的なデータの蓄積など、本稿をさ
らに発展させることは可能であると考えられる。

最後に本稿の今後の展望について述べたい。今後の展望は2つある。第1に、今回筆者らが実施し
た講習内容について、より方法論的に厳密な質的研究を行う過程で、体育科教育学の議論との理論的
な擦りあわせの検討である。本稿では講習プログラムの紹介と簡単なアンケート調査のみに終始して
おり、講習内容の実践的、理論的な内容、調査方法についても再検討する必要があると考えられる。

第2に、他地域における調査の実施である。特に長野県軽井沢町では、長きにわたり継続的な選手
強化が進み、国内トップクラスの選手を多数輩出している。また、本州の各県から多数の学校プログ
ラムを戦略的に受け入れている。これらのノウハウなどを学ぶことが必要と考えられる。いずれにせ
よ、今後も地域の中に埋め込まれたカーリングの実践にこれからも着目することは、日本のカーリン
グ界の発展に寄与するものと推察される。以上の課題に取り組むことを筆者の課題とし、本稿を結ぶ。

●注

(1) カーリング

本稿は、「カーリング」について論じる。ただし、本稿では最低限のカーリングのルール、シ
ートの名称など、「カーリング中継（例えば、全農日本カーリング選手権、オリンピックなど）」におい
ても実況アナウンサーが使用する専門用語については解説しない。日本カーリング協会、北海道カ
ーリング協会のホームページや、『公益社団法人日本カーリング協会オフィシャルブック新み
んなのカーリング』（小川，2014）などをご参照いただきたい。

(2) 一般社団法人「みどりスポーツクラブわかかない」

2022年10月、稚内市に誕生した総合型地域スポーツクラブである。詳細はこちらのサイトを参
照されたい。<https://midospo.com/>

●参考文献

北海道カーリング協会 <http://www.curling.hokkaido.jp/trivia.php>（閲覧日：2023年2月2日）

公益社団法人日本カーリング協会、

<http://www.curling.or.jp/about/about000.html>（閲覧日：2023年2月11日）

公益財団法人日本オリンピック委員会、「カーリング」（閲覧日：2023年2月11日）

<https://www.joc.or.jp/sports/curling.html>

小川豊和監修，2014，『公益社団法人日本カーリング協会オフィシャルブック新みんなのカーリン
グ』，学研教育出版，東京。

大沼義彦，2010，「小さな町の大きな挑戦」，石井隆憲，田里千代＝編著『知るスポーツ事始め』，
明和出版，東京，pp2-6。

侘美俊輔，2020，「『カーリング部』設立メンバーによる4年間の取り組みと地域づくりの可能性
～稚内北星学園大学カーリング部の歩みを事例に～」，『稚内北星学園大学紀要』
21：46-83。

「主体的、対話的で深い学び」に向けた教材としての「カーリング」への期待
～市内教員向け「カーリング授業事前研修」の試み～

－2021, 「『主体的、対話的で深い学び』に向けた教材としての『カーリング』の可能性
～『免許状更新講習』における『カーリング』を活用した授業展開～」, 『稚内
北星学園大学紀要』22: 55-80.

東原文朗, 2019, 「よそでおこなわれていないスポーツを振興していたら, まちづくりにつなが
った! 育つべくして育ったカーリング娘」, 松橋崇史, 高岡敦史=編著『スポーツとまちづくり
の教科書』, 青弓社, 東京, pp.118-122.

●謝辞

本稿は, JSPS 科研費 [JP22K17734](#) 「『通年型施設』の完成を契機とした地方のカーリング普及・
拡大・選手強化の実証的研究(研究代表者: 侘美俊輔)」による助成を受けました。研究経費のご支援に
感謝申し上げます。また, 教員向けの「カーリング授業事前研修」, 協会員向けの「事前講習」にご
参加頂いた受講生の皆様, ならびに講習の機会, 会場をご提供いただきました稚内市教育委員会, 稚
内市みどりスポーツパークとその職員の皆様に御礼申し上げます。とりわけ多大なるご理解とご協力,
貴重なご助言を賜りました古川亮英館長, 飯田俊哉さん, 稲場滉人さんには深謝申し上げます。また,
アンケート調査のデータ整理を引き受けてくださった奥山美佳さんのご協力にも感謝いたします。

●英文タイトル

Expectations for Curling as a Teaching Material for "Proactive, Interactive, and Deep Learning":
A Trial of "Curling Classroom Pre-Training" for Teachers in the City of Wakkanai

●英文要約

In Japan, the importance of "independent, interactive, and deep learning" is stated in the new
Courses of Study. In view of this situation, the author examined the possibility of "Curling as a teaching
material" based on the class program for the "Teachers' License Renewal Course" in 2021, and published
this paper. The remaining issues raised in this paper are "how teachers with little experience in teaching
curling can organize and implement lessons as a unit in schools" and "what support can be provided by
curling associations and other organizations".

This paper aims to examine the future possibilities for "making curling into a teaching material" by
using the "Curling class pre-training session" held to make it easier for school teachers to understand
how to implement curling classes and what they should pay attention to, and an interview with a former
principal conducted to decipher the logic of the school side, as case studies. The purpose of this study was
to examine the possibilities for "making curling into a teaching material" in the future.

●英文キーワード

Curling

Proactive, interactive and deep learning

Communication

Strategy
Teaching materials